月夜のかくれんぼ

槇本楠郎

青空文庫

きれいな、えひがさのようなお月さまが、ぽっかりと東の空にうかんで、ひろい田んぼはクリーム色にかすんでいました。

田んぼは、いちめんに、き色とみどりのなの花ばたけで、ひるまのあたたかさが、そこらじゅうにこもっていて、うっとりとするようななの花のにおいが、むせっぽくただよっています。

「みんな、みんな、でておいで、
なの花月夜だ。まだ、よいだ。
かくれんぼするもの、よっといで……」

どこからか、うたうように子どものこえがきこえたと思うと、かすんだ田んぼの、あちこちの小さな家から、たちまちころころとかけだしてきて、なの花ばたけのわきの、おじぞうさんのまえの道へ、子だぬきのような子どもが集りました。ちょうど六人です。

「みんな、みんな、でておいで、
なの花月夜だ。まだ、よいだ。
かくれんぼするもの、よっといで……」

六人がワになって、もう一どうたうと、またあちこちの小さな家から、ころころと小さな子どもが五人ばかりかけだしてきて、なかまにはいりました。

「もう、みんなきたね。」

そこへまた、なの花ばたけの小道から、二・三人の子どもが、かけよってきました。
「もう、みんなきたね。」
「もう、はじめよう。」
かわいい子どもたちは、まん丸いワになって、ジャンケンをはじめました。うたうようにかけごえをして、おどるようにはねながら。
「ジャンケン、ポンよ。あいこでしょ。」
「ジャンケン、ポンよ。あいこでしょ。」
お月夜は、まだよいのくちで、子どもたちは野良からかえったおやたちと、やっといま、ゆうはんをたべおわったばかりなのでした。
えひがさのようなお月さまが、ほんのりと、あたたかそうにてって、うっとりする、きれいな、なの花月夜です。
ジャンケンで鬼がきまると、みんなはひとりの男の子をのこして、バラバラと、てんでにけむった月夜の、ひろいなの花ばたけのあちこちへ、ちらばっていきました。
「ひィ……　ふゥ……　みィ……　よォ……」
鬼になった男の子は、石のおじぞうさまのまえにしゃがんで、手でかおをおおい、かぞえつづけました。
十ずつ、十ぺんかぞえると、かおから手をはなし、スックと立って、なの花ばたけにむかっ

て、よびかけました。
「もう、いいかい？」
　すると、ボウとかすんだなの花ばたけのむこうのほうから、二・三人のこえが、ゆめの中のこえのようにひびいてきました。
「もう、いいよう……」
　小さな鬼は、なの花ばたけのほそいあぜづたいに、きえたこえのほうへ、ころがるように走ります。みだれ咲きのなの花に、からだがさわると、ヒラヒラと花びらのちるように、あちこちからチョウチョウがとびだしました。
「もう、いいかい？」
　鬼の子どもが、またよびかけると、
「もう、いいよう……」
と、目のまえにひろがるなの花ばたけのあちこちから、こだまのようにこえがひびいてきました。
　小さな鬼はそのこえをおって、なの花ばたけをまえへまえへ、進んでいきます。けれど、いけばいくほど、そのこえはとおくへとおくへにげていき、なの花ばたけはひろくなっていくようです。
「もう、いいかい？」

「もう、いいよう……」

たしかに、こんどは、だいぶおっかけてきたと思ってよぶと、やはりとおくからきこえます。そこで、またおっかけながらよびかけます。

「もう、いいかい？」

「もう、いいよう……」

こんどは、すこしちかくできこえました。そこで小さな鬼は、そのこえのしたほうへ、どんどんおっかけていきます。

でも、ひろいなの花ばたけで、なかなかおいつきません。このひろい田んぼは、村にいない大地主のものでした。けれど、それはちかいうちにすっかり、この田んぼをかりてつくっているお百姓たちが、お金でじぶんのものにかいとれることになったのです。

だから、この子だぬきのような子どもたちは、おやからそれをきいて、とてもうれしいのでした。

「もう、いいかい？」

「もう、いいよう……」

ヒラヒラ、き色いチョウチョウのとびたつ、なの花ばたけのかすんだ中を、小さい鬼はおぼろ月にてらされて、あたまだけ見えかくれしながら、こえのしたほうへ進んでいきます。

「もう、いいかい？」

「もう、いいよう……」

小さな鬼が、花の中にもぐっている（はなもぐり）という、かわいいコガネムシのように、なの花ばたけをにげていくこえをおっかけていると、ふと、まじかのところに人かげが見えました。だれだろうと思いながら、またよびかけました。

「もう、いいかい？」

「もう、いいよう……」

だが、きこえてきたのは、ずっととおくからのこえで、すぐそばのなの花ばたけの中をいく人かげは、なんともこたえません。小さな鬼は、おかしいなと思いました。

「もう、いいかい？」

またよびかけましたが、へんじはとおくからきこえてくるばかりで、すぐそばをいく人かげは、だまっています。き色いなの花の上に、くびだけ出して、とてもおちついて、ゆっくりゆっくり歩いています。

「もう、いいかい？」

もう一どよびかけて、小さい鬼は、十メートルばかりまえをいくその人かげを、じっと見ました。だが人かげは、べつにおどろくようすもなく、ふりむきもしません。あいかわらず、おぼろな月の光をあびて、ゆっくりゆっくり進んでいます。

小さい鬼は、はらがたって、おっかけながらよびました。

「おい、きみ、見つけたよ！　ずるいや、へんじもしないで！」

と、その人かげは、はじめて気がついたというふうに立ちどまって、ひょいとふりむきました。そしてニッコリとわらいましたが、そのかおは、見たことがあるようで、またないようで、だれだか思い出せませんでした。

「きみ、見つけたよ。きみも鬼になるんだよ。」

すると、その人かげは、またわらいましたが、そのとき、あごの下のくびに、赤いネクタイのようなものが、ちょっと見えました。小さな鬼は、ふしぎに思いました。そのかおは男の子なのに、赤いそんなものをつけているからです。

（ほんとに、おかしいな。あのかおは、だれだろう？）

そうかんがえているうちに、小さな鬼には、そのかおが、さっきじぶんが、そのまえにしゃがんで目をつぶって、かずをかぞえた、あのおじぞうさんのかおだと思われてきました。すると、あごの下の赤いものは、おじぞうさんのよだれかけだ、とはっきりわかりました。

（あッ、おじぞうさんだ。いいなの花月夜なので、おじぞうさんも、ぼくたちのかくれんぼの、なかまいりをしてるんだな？……）

そう思ったとたんに、その人かげはなの花ばたけの中にしゃがみこんで、見えなくなってしまいました。小さい鬼は、すぐそのばしょにいって見ましたが、そこにはだれもいませんでした。

（ふしぎだ……きつねか、たぬき……だったかな？）

きゅうにさびしくなり、すこしこわくなってきた鬼は、もうまえへ進んでいく気になれず、さびしさをうちけすように、大きなこえで、「もう、いいかいッたら、もう、いいかい？……」を、くりかえしながら、もとの道ばたへ出てきました。と、ふしぎにもそこには、いつものように赤いよだれかけをかけた石のおじぞうさんが、月の光をあびて、しずかにつっ立っていました。それはこわくない、見れば見るほどやさしいかおのおじぞうさまでした。

空には、えひがさのようなおぼろ月がうかび、きえかかったにじのような月のかさが、大きくできていました。小さい鬼は、すっかりあんしんして、こころがおちつき、げんきのいいこえで、またなの花ばたけによびかけました。

「もう、いいかいッたら、もう、いいかい？」

すると、なの花ばたけのあちこちから、

「もう、いいよッたら、もう、いいよう！」

と答えながら、だんだんそのこえは道のほうへ出てきました。

―昭和二二年五月八日作―

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　三〇巻」ほるぷ出版
　　1978（昭和53）年11月30日初刷発行
底本の親本：「日本児童文学全集　7」河出書房
　　1953（昭和28）年6月
入力：菅野朋子
校正：雪森
2014年6月12日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

月夜のかくれんぼ

槇本楠郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/